

インタビュー

三井物産が手掛ける水産加工品輸出事業 ～気仙沼ブランドを東南アジア、世界へ～

三井物産株式会社 東北支社 業務室 事業推進チーム **はせがわ たかひろ**
長谷川 貴大

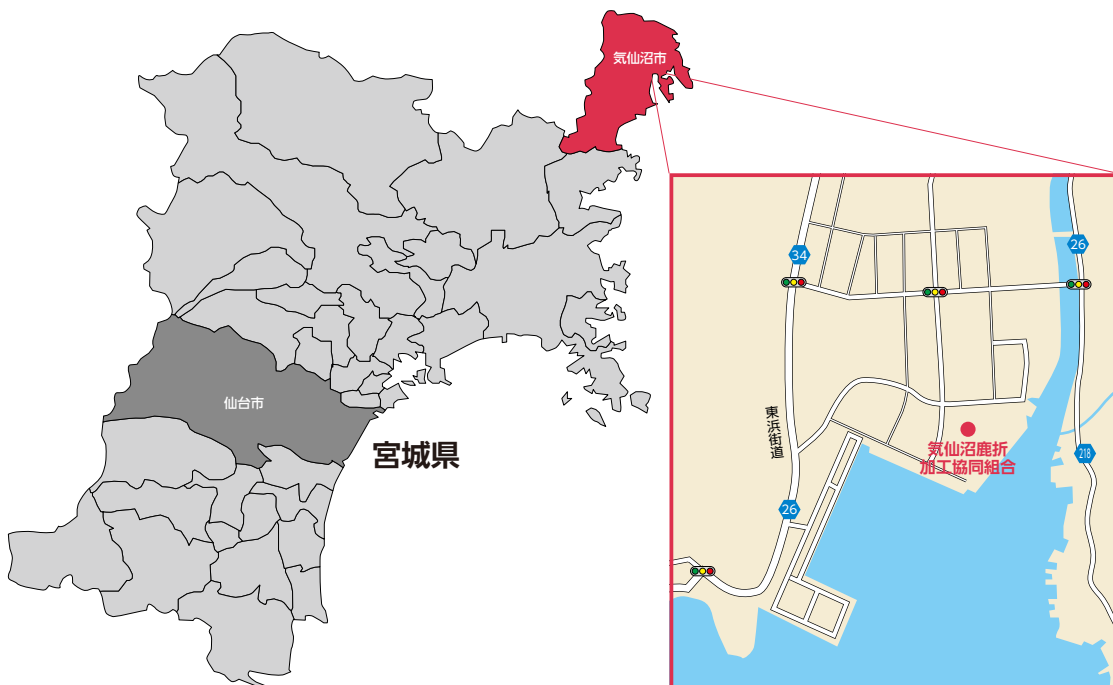


「ズームアップ」は、「働く人と仕事」をテーマに商社各社のさまざまなビジネスや人材をご紹介します。今号では、東北・宮城の水産事業復興のために、気仙沼水産加工品の販路拡大を目指す、三井物産(株)東北支社 長谷川様にお話を伺いました。

1. 東日本大震災から、「気仙沼鹿折加工協同組合」の設立まで

2011年の東日本大震災発生後、当社は緊急対応として東北被災3県（岩手県・宮城県・福島県）へ義援金や物資の提供を行いました

が、事業活動や社会貢献活動を通じた中長期的な視点の必要性を感じ、「ビジネスを通じた復興支援」に取り組んでまいりました。その取り組みの一つとして、気仙沼の水産加工品販売の支援を行っています。





事務所棟



海水滅菌装置

宮城県の北東に位置する気仙沼市は、世界三大漁場の一つとされる三陸沖漁場を控え、古くから水産都市として漁業が大変盛んな地域です。三陸沖も震災によって甚大な被害を受け、漁獲量は激減。このような状況の中、村井 嘉浩宮城県知事、住友商事(株)岡 素之会長（当時）と、当社会長 檜田（当時）の3人が一堂に会した場で、甚大な被害を受けた気仙沼市の水産業をもう一度取り戻そうと意気投合したことが契機となり、東北の水産ビジネス支援が始まりました。

その第一歩が、住友商事と当社の商社連合による「気仙沼鹿折加工協同組合」の設立です。2011年10月に18の地元企業が集まってわれわれ商社連合に声を掛けていただき、わずか10ヵ月で組合が立ち上がりました（2012年8月）。その後、組合事務所棟・共同利用冷蔵倉庫・海水滅菌処理施設といった共同利用施設を順に建設し、稼働させています。2016年には農林中央金庫から支援金

を得て輸出事業を開始した他、2017年3月には組合決算初の黒字化を達成しました。

2. 組合として悲願だった「輸出事業」

組合の運営が軌道に乗った今、当社は大きく四つの取り組みを行っています（①水産加工品の販路拡大、②輸出事業、③ブランド化推進、④人材派遣、インフラ整備支援）。2011年をピークに水産加工品の国内消費量は減少しており、組合にとって国内での販路拡大はもちろんのこと、海外市場に目を向けなければならないタイミングでした。現在当社は、東南アジア、特にタイ・シンガポール向けのプロモーションを促進している他、現地の海外販路開拓サポート会社と連携してコンサルタント機能を組合の企業に提供しています。

三陸の水産加工品が高品質であることは、まだまだ世界に知られていません。また、異なる食文化の地で、商品がそのまま受け入れ

られるとも限りません。そこで当社は、現地のバイヤーに組合の商品や商品の価値・良さを分かってもらいたいと考え、フードエキスポやアンテナショップでの商談会に積極的に



組合商品を用いたおにぎりイベント



Takashimaya Singaporeにおける缶詰フェア



シンガポールでの食材PRイベント

出展してきました。各イベントでは実演販売を行っており、どんな商品が現地に受け入れられるのか、生の反応を感じてリサーチをしつつ、バイヤーとのつながりを深めているところです。東南アジアを中心に輸出を手掛けていますが、今後は一層消費力の高い中国、そして成長分野であるEC販売にも焦点を当てていく予定です。すでに知名度が高いイクラやカニを突破口として、メカジキやサバ、サンマなどの水産品を売り込み、日本食のアウトバウンドを促進していきたいと考えています。

3. 持続可能な「ビジネスを通じた復興」


震災以降、当社は今回ご紹介した水産ビジネスの支援の他にも、東北の林業や観光ビジネスの支援も行ってきましたが、これらの事業を「点」として産業復興につなげるのではなく、「線」として未来に向かって持続的に発展させたいと考えています。例えば、先に述べた輸出事業では、近い将来に組合の皆さまが「自立自走」できるように、実務ノウハウを伝えるだけでなく、海外のバイヤーとの関係づくりをサポートしています。組合の企業においても、働き手の減少が深刻化していますが、そのような課題の中でも事業を継続できるよう、人材育成のサポート役も当社が担っていききたいと思います。

当社が今日まで組合の皆さまをはじめ、東

北の皆さまと協力させていただいている背景には「三井物産らしい復興への関わり方」があります。当社は組合と一丸になって新しい商売づくりに励んでいます。世界中に持つ駐在員事務所や子会社等のネットワークを通じて、最新の情報を常時キャッチできるのも、販路

を拡大していく上での強みの一つでしょう。

今後も、地元企業や現地企業の皆さまと連携を強化し、太く長いビジネスを続けることで気仙沼・東北の復興に貢献できればと考えています。

(聞き手：広報・CSRグループ 椎名彩衣) 

「^{もり}仙台うみの杜水族館」を見学しました！

2015年7月1日、仙台市にオープンした「仙台うみの杜水族館」。

この水族館プロジェクトの開発・推進および資金調達を主導したのが、三井物産。地域の観光産業活性化につながる集客施設の誘致を構想していた仙台市に対して民間資金を活用した新しい水族館の事業計画を提案したのが始まりです。

館のコンセプトは『海と人、水と人との、新しいつながりを「うみだす」水族館』。各エリアは、三陸の海のさまざまな表情にスポットライトを当てています。一番の目玉である大水槽「いのちきらめくうみ」では、三陸沿岸・近海に生息する50種、2万5,000尾の魚が泳いでいます。

地域と共に水族館事業を推進し、新たな産業のつながりを生み出すことで、雇用創出や地域活性化に貢献をしたい。三井物産がこれまで培ってきたネットワークを活用して誕生した、仙台うみの杜水族館は新たな復興のシンボルの一つとなっています。



全景 (HPより)



大水槽「いのちきらめくうみ」



エムサービス (三井物産子会社) が手掛けるフードコート